

第6回 冬季研究会 2014.1.11~12 於：伊東

講演『学びの共同体の改革 課題と展望』 佐藤学

茨城県那珂市立第二中学校 伊藤 紳一郎

●学びの共同体の改革の特徴

・学びの共同体の授業改革と学校改革を推進してきた。この改革は、以下に示すいくつかの特徴を有している。

1 技術や方式ではなく、ヴィジョンと哲学と活動システムによる改革であるということ。

「学びの共同体」のやり方があるわけではない。「どういう学校をつくっていくのか?」「どういう授業を求めていくのか?」そのヴィジョンを共有する。一言でいえば、「一人残らず（誰一人排除しない）子どもの学ぶ権利を保障する」「一人残らず（誰一人排除しない）教師が専門家として成長できるような学校」ということです。

2 21世紀型の授業と学校を実現する改革であるということ。

（質と平等の同時追求、プログラム（目標達成）型からプロジェクト（思考探究）型へのカリキュラムの脱皮、一斉授業から協同的学びへの転換、教師の学びの共同体（同僚性）の構築、保護者市民の参加と連帯。

3 授業の改革と学校の改革と学校経営（教育行政）の改革を一体として推進していること。（民主主義の実現、学び権利の保障と教師と学校の自律性の構築）

4 聴き合う関係を基盤とする対話的コミュニケーションの実践であること。

「学び合い」は「話し合い」ではない。聴き合う関係こそが学びをつくる。

グループ学習を取り入れても、学力が上がるとは限らない。むしろ、学力差が大きくなることもある。なぜか。それは、「話し合い学習」だから。どういうグループ学習を入れるかが大切。話し合っても内容がなければ意味がない。しかし、学びの共同体の実践は、「聴き合う関係」づくりである。ジャンプのある学びである。「聴き合う関係」と「ジャンプ」のないグループ学習は危険である。

5 小学校、中学校、高校を一貫した授業改革、学校改革であること。

6 運動ではなく、ネットワークであること。（脱中心化、多様性の尊重）

7 国際的な連帯と協同で推進されていること。（韓国、中国、台湾、シンガポール、インドネシア、メキシコ、アメリカなど）

●授業と学びの様式の遅れ

日本の教育の最大の遅れの一つは、授業形態と学びのスタイルの改革の遅れである。PISA 調査の報告において、次の表に見るように、日本の数学の授業は他の諸国と比べて「協力学習（cooperative learning）」（小グループ学習）の機会とその価値付けが極端に低く、一斉授業と個人学習が中心で、65カ国中韓国と並んで最低である。

・日・米・韓・中の高校生と比較調査

①受動性＝日本：ノート（93%）、積極的発言（日本：14%、米：51%、中：46%）

②古い学習観＝好きな授業：日本：教科書を覚える（71%）、米：よく発言させる（73%）、中国：観察や応用（96%）、韓国：見学や体験（78%）

●（学びの共同体の）ヴィジョン

・あらゆる改革において第一義的に重要なのはヴィジョンである。学びの共同体の改革は、「学校を子どもたちが学び育ち合う場所であり、教師も専門家として学び育ち合う場所であり、保護者や市民も学校改革に参加し協力して学び育ち合う場所」と再定義し、学校と教師の公共的使命として、一人残らず子どもの学ぶ権利を実現し、その学びの質を高めることと、一人残らず教師が専門家として学び同僚性を構築し、大多数の保護者の参加と協力も獲得して、民主主義社会を準備することを掲げている。

●（学びの共同体の）活動システム

・学びの共同体の学校改革においては、上記のヴィジョンと哲学の実践として、三つの活動システムによる実践を推進している。第一は教室における協同的学び（collaborative learning）の推進である。第二は学びを中心とする授業のデザインとリフレクションによって教師たちの学びの共同体（professional learning community=同僚性）を構築することである。第三は、保護者の「学習参加」である。

●日本の授業における3種類のグループ学習

日本で普及している3種類のグループ学習とその理論的基礎

- 1 班学習と呼ばれる「集団学習」=集団主義（collectivism=集産主義）の伝統（1930年代から1960年代）
- 2 協同学習（cooperative learning）による「話し合い」学習。アメリカでも日本でも最も普及している。
- 3 協同的学び（collaborative learning）
学びの共同体における協同的学びは、ヴィゴツキーの発達最近接領域の理論と、デューイの民主主義と対話的コミュニケーションの理論を基礎としている。

●学びの実践は三つの＜疎外＞の克服

・学びにおける三つの疎外=①＜対象性=テキストと対話＞の喪失、②＜他者＞の喪失、③＜意味＞の喪失=学びはこの三つの疎外を克服する実践である。

①モノ・資料・テキストに出会わせなければいけない。②つぶれる子ども・教師は必ず一人である。③やったことがどこに、どうつながるのか、学ぶことにどういう意味があるのか、がわからなければならない。

●「聴き合う関係」が要諦

・聴き合う関係が、すべての生徒を「活動的な参加者」いわゆる「学びの主人公（protagonist）」にすることを可能にする。

・聴き合う関係は、モニタリングによる模倣の学びもスキャフォールディングの学びも、その関係の内側から促進する。

・聴き合う関係は、学習者の間（in-between）を幸福にし、互惠性を生み出す。

・聴き合う関係は、仲間同士の信頼を強め、静かで快適で、しかも知性的な雰囲気準備し、学びに最適な環境をつくりだす。

●真正の学び (authentic learning) : 「話し合い主義 (dialogism)」 = 「対象の喪失 (missing object)」の克服

「対象 (テキスト)」は、私たちの協同的学びにとって決定的に重要である。対象を喪失した「話し合い学習」は克服しなければならない。「対象性」の重要性について、レオンチェフは次のように述べている。

活発な話し合いは、学びがありません。それは、既にわかっていることを発表し合っているだけだからです。学びというのは、未知への探求であるから、活発になるわけがない。

グループで、課題に黙々と取り組む姿も学びである。探求しているから。

「活動の基本的で、時には構成的といわれる性格は、その対象性にある。適切に言えば、〈対象 (Gegenstand)〉は、すでに潜在的に活動そのものの概念を含んでいる。〈対象なき活動〉という表現は、まったく無意味である。」(レオンチェフ)

●学びの成立要件

- ・どの授業においても「共有の学び」(教科書レベル)と「ジャンプの学び」(教科書以上のレベル)の二つの協同的学びを組織している。
- ・また、学びの成立要件として〈真正の学び (authentic learning)〉と〈聴き合う関係〉と〈ジャンプの課題〉の三つの要件を掲げ、この三つを充足する学びを追求している。

●学びはジャンプ (Learning is Jumping)

- ・教室における学びは、多元的な発達の最近接領域が同時に成立している状況を文脈として、「ジャンプ」として成立している。したがって、学びの課題のレベルが決定的である。
- ・学びの共同体では、通常、「共有の学び」(教科書レベル)と「ジャンプの学び」(教科書以上のレベル)の二つの課題で協同的学びを組織している。両者はともに、そのほとんどが発達の最近接領域の範囲内に位置付いている。しかし、時には「発達の最近接領域」を超えて学びの課題が設定される場合もある。
- ・「ジャンプの課題」はできる子によって有意義であるだけでなく、できない子にとっても有意義である。なぜなら、できない子は「ジャンプの課題」においていっそう夢中になって学び、たとえジャンプの課題は達成できなくても、基礎的概念を獲得している。
- ・成績の低い子どもが、「共有の課題」より以上に「ジャンプの課題」において夢中になって学ぶのは、驚くべき事柄である。

●ジャンプの課題づくりは、なぜ難しいのか?

- ・ジャンプの課題づくりを難しくしている要因は一つではない。いくつかの要因が絡み合っている。
- ①教師の教科の教養 (学問・芸術) が欠如している。=教科書しか教えられない。
- ②ジャンプの課題を、その学年の教育内容の範囲内で探している。
- ③「(3分の1は) 正解にいたらなくてよい」という認識が欠如している。あるいは、それが「怖い」。
「すべての子どもがわかる授業」がいい授業ではない。「すべての子どもがわかる授業」よりも、「すべての子どもに学びが成立する授業」がいい授業である。
- ④ジャンプの課題を〈難しい課題〉と誤解している。

⑤正しいジャンプの課題は一つしかないと誤解している。

●授業の基本技法＝新しい授業研究は<デザイン>と<リフレクション>

①「プラン」と「デザイン」の違い

「プラン」は授業前に決定される。「デザイン」は授業過程においても構成される。

②デザインは単純（simple）に省察と関わりを繊細（sensible）に。

課題は3つが望ましい。デザインがシンプルな人ほど、授業が緻密で子どもとの関わることもできる。デザインが複雑であればあるほど、子どもとの関わりや授業の展開が粗くなる、雑になる。

③<始まり>がすべて＝優れた教師は始まりにすべてをかける。

④学びの課題の<デザイン>と学びの省察<リフレクション>が新しい授業研究

講演『冬季研究会のまとめ』 佐藤学

●学びの共同体が授業を変える

授業改革の進展＝<聴き合う関係><ジャンプのある学び><真正の学び>この三位一体が、日本の授業を変える。

「学びの共同体の授業は、どんな授業ですか？」への回答は、「コの字型の教室と男女混合4人グループの協同的学び」ではない（手段でしかない）、<聴き合う関係><ジャンプのある学び><真正の学び>の三位一体の追求が、学びの共同体の授業である。

「質の高い学び」も、この三位一体の質の高さにある。

これからの授業改革は、実践事例を豊富にすること。「モデル」の創造ではなく、「多様な典型とヴァリエーション」の創造を追求しよう。

●今回の成果＝真正の学び

今回の成果の第一は、<真正の学び>を実現する鍵が<対象性の回復>にあることを明らかにし、実践的に検証したこと。

<真正の学び>における活動が、対象の中に潜在的に埋め込まれていることを明らかにし、実践的に検証したこと。

<真正の学び>を追求することによって、<ジャンプのある学び>をデザインし、学びを喪失した<話し合い>の協力ではなく、学びを実現する<聴き合い>による協同を実践することを明確化したこと。